

いじめ問題に立ち向かう

-23-

予防教育①

「予防教育の光景」徳島市近郊の小学校。3年生は4クラス。どのクラスからも児童の歓声が聞こえる。4組に入ってみた。誰もが喜々として授業にのめり込んでいる。時折、前のスクリーンにアニメが映し出される。心地よい音楽も流れ出した。教室の後ろには10人ほどのネクタイ姿。県外からの視察者らしい。母親の姿も見える。おっと、NHKのカメラも回っている。何が起きているのか。この授業は一体

解決できない「いじめ」はなくならないと言ふ人が多い。被害者の生命が失われるほどのひどいいじめも止まらない。学校だけはこの問題を解決してほしいと願う者も多い。しかし、今の学校のやり方を見ると、解決は到底無理だと諦観してしまう。

因へのアプローチ いじめの発生には多様な要因が絡んでいる。いじめにかかわる人の動きを区別して4層や6層の構造を指摘する見解は、要因の多さを示している。またいじめは、①加害者や傍観に至る大本の特性（性格）と、②役割や立ち位置の異なる対人行動の相互の作用が生んでいる。その相互の作用には、担任や学校全体、家庭の成り立ちも含まれているほどの複雑さである。

発達過程で子の特性に介入

なぜ解決できないのか。その理由は三つある。第一に、いじめ加害者や傍観者の特性の発達過程を考慮に入れ、その特性に踏み込んだ介入がなされていない。

第三に、いじめ問題を解決するには、相当な時間と労力がかかることに目を背けている。別の言い方をすれば、それだけの覚悟がない。いじめ加害者や傍観に至る人の特性は、生後の数ヶ月間にも及ぶ経験によって形成される。同じだけの時間を費やすことはできないが、それでもその教育にはかなりの時間が必要、労力が要る。

いじめ問題への教育は、いじめが起ったとき、あるいは起ころうとしているときに本格的に始まることが多い。その場合は、付随的な教育に終始することが多く、①と②の要因が機能するのを抑止する教育になる。つまり、加害者、傍観者などそれぞれの行動に至る根本的な特性を容れさせる教育にはなっていない。

この場合の抑止力は、特定の教員の存在、罰を中心としたルールの設定（出席停止や警察力行使など）が中心になることが多い。この抑止力が外れると、いじめは再び発生する。時が移れば、また場が変れば、人は性懲りもなくいじめの歯車を動かす。

▼今の学校教育は、問題をとて言える特性に介入しなければ、本当の問題解決はない。第二に、人の判断や行動の成り立ちを素人考えで捉えている。残念ながら、学校教育は科学ではない。主観と経験が幅を利かす世

界である。往々にして主観や経験は間違いを犯す。近年の脳科学は無意識の動きを強調しながら、人間観を塗り替える知見を次々に出している。それらは主観や経験が及ばない世界にある。そのことを知らなければ、子どもを育成することはできない。

▼ユニバーサル予防教育の必要性 本来、学校教育が目指すところは、いつでもどこでもいじめを起こさない子どもを育成すること

である。それには、子どもに特性に踏み込んだ本気の教育が必要になる。また、どの子どもも将来的にいじめ発生に関わる問題を持つと考えた予防が必要になる。この観点に立ち、全ての子どもを対象にして、問題を持つ前に実施される予防をユニバーサル（1次）予防という。

近郊の小学校は、子どもたちが健康上、適応上の問題を持ったときに何とかしよう

としようという、いわば治療的な対処にやっきになっている。問題を持たない子どもを育成する、予防という観点が全くの手薄状態だ。この治療と予防は、子どもの健全な育成には欠かすことができない両輪になる。いじめ問題も、このユニバーサル予防を本気で実施することが、問題の繰り返しを断つ救世主になる。

筆者は長年、子どもの心身の健康と適応を守るユニバーサル予防教育の開発と実践に携わってきた。その経緯の中、この教育は何年も継続して、常時全ての子どもに実施することの必要性を強く感じていた。しかし、これは難題であった。

とは言え、子どもたちを救うには、このことが必要になる。鳴門教育大学の予防教育科学センターは、この難問に挑み、斬新な教育を開発し、着々と成果を挙げている。本シリーズで何回かにわたって、その新教育の理論と実際、そして全国普及の途に就いた姿をお見せしたい。

山崎 勝之 鳴門教育大学大学院教授 予防教育科学センター所長



近郊の小学校は、子どもたちが健康上、適応上の問題を持ったときに何とかしよう

としようという、いわば治療的な対処にやっきになっている。問題を持たない子どもを育成する、予防という観点が全くの手薄状態だ。この治療と予防は、子どもの健全な育成には欠かすことができない両輪になる。いじめ問題も、このユニバーサル予防を本気で実施することが、問題の繰り返しを断つ救世主になる。

筆者は長年、子どもの心身の健康と適応を守るユニバーサル予防教育の開発と実践に携わってきた。その経緯の中、この教育は何年も継続して、常時全ての子どもに実施することの必要性を強く感じていた。しかし、これは難題であった。